

2022年8月7日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書9章42～50節

説教題：十字架で塩味を

神学校の先生が「本物のパピルス」を見せて下さったことがあります。私達が使っている紙に比べると、厚くて、硬くて、ポリッと割れてしまいそうな、使い勝手の悪そうな「紙」でした。聖書が書かれた時代、私達が持っているような紙はありません。「パピルス」か、羊の皮をなめして作った「羊皮紙」と呼ばれる「紙」か、どちらかです。どちらも高価だったでしょう。また印刷術等もありませんから、全て手書きです。要するに誰でもが聖書を持てる、という時代ではないのです。当時のクリスチャン達は「家の教会」に集まり、そこで読まれる聖書の言葉を聞いて、覚えたのだと思います。ということは、聖書は、ある意味で「教会で読まれ、皆が覚える」、そういうことを前提として書かれている面もあると思います。覚えるために一番良いのは、連想出来るようにすることです。「4月」、「4月と言えば桜」、「桜といえば桜餅」…と連想出来るようにしておく覚え易いです。私は高校時代、英語の単語を「連想暗記術」という方法で覚えました。連想で覚えると、いつまでも忘れないのです。

実は今日の箇所は、そのように『連想してイエス様の言葉を覚えることが出来るように』ということ在意図されて書かれている箇所ではないかと、学者達が言うそうです。前回の箇所の最期、41節に「…キリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません…」(41)とありました。「キリスト者に親切にする」ということです。そうすると、この言葉から、イエス様が「その逆のこと」を言われた言葉を連想することが出来ます。42節「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです」(42)。今度は「つまずき」という言葉が出て来ますから、「他の人をつまずかせる」のではなく「自分がつまずかないようにしなさい」と言われた言葉を連想することが出来ます。そういう具合です。なぜそのように言われるかと言うと、「全体としてテーマの一貫性」に欠けるように見えるからです。全体の主題(テーマ)、ポイントが掴み難いのです。

ですから「そういうこともあるかも知れない」という可能性を確認した上で、しかし、「福音書」記者マルコが「1つのまとまった箇所」として書いているのは、やはり彼なりの意図が、伝えたいイエス様のメッセージがあったからではないかと思うのです。そしてそれはもちろん、イエス様がそのご生涯で教えておられたことを反映するものはずです。だからこそ、神の許しの下で、このような形で聖書に収められたのです。では、マルコが意図した全体テーマとは何なのでしょう。

この箇所を理解するための中心的な言葉は、一番多くのスペースが割かれている「43～47節」の中の、43節「いのちにはいる」、45節「いのちにはいる」、47節「神の国にはいる」の言葉だと思えます。「いのちに入る」と「神の国に入る」は、同じ意味で使われています。つまり、ここには『神の国』に入ることの、何にもまして大切なことが語られていると言えます。この『神の国』に入ることの重要性」という言葉をキーワードとして、全体をもう一度眺めてみましょう。

42節「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は…」(42)。「小さい者」がつまずくと、その人は「神の国」に入ることが出来ません。そのことは言い換えるならば、1人の人が「神の国」に入ることが、どれだけ重要かということです。しかし、他の人をつまずかせることも大問題ですが、その前に、まず自分が「神の国」に入ることが出来るようにしなければなりません。そこでイエス様は、「私達が『神の国』に入るために私達をつまずかせるものがあれば、切って捨ててしまった方が良い」と言われる。「それを切って捨てても『神の国』に入った方が良い、さもないと『ゲヘナ(地獄)新共同訳』に投げ込まれる」と言われるのです。

ここで確認したいのは、「神の国」とは何か、「ゲヘナ(地獄)」とは何か、ということです。「神の国」の「国」という言葉は、「支配」という言葉と同じ言葉です。『神の国』に入る」と言うのは、

「日本の国に入る」というような「場所的な意味合い」ではありません。「神の支配に入る」ということです。人は「キリストの十字架を『自分のためであった』」と信じることによって「神の御手の中」に、「神の保護下」に入っていくのです。そして、その「神との関係」が私達を守って行くのです。私達は、やがて死を迎えます。生と死の間には、激しい断絶があります。こちらから死の世界へ手を伸ばすことは出来ません。だから、私達は死を恐れます。しかし、神との関係にあれば、神は生も死も支配しておられる方ですから、神との関係が私達を「死の滅び」から守って行くのです。その意味で「(永遠の)いのちに入る」ことなのです。それは「天の御国」に続いて行くものなのです。私達は、ここ3年あまりの間に何人もの兄弟姉妹と地上の別れを経験しました。しかし、ご葬儀のたびに「この方は天国に行かれたのだ」と、私達には確信が与えられます。神様が、そう語って下さるのです。だから、葬儀は悲しみですが、希望の時でもあります。いずれにしても、だから「神との関係に入ること」が大切なのです。

一方、「ゲヘナ(地獄)」ですが、これはもともと、エルサレム城外にある「ベン・ヒノムの谷」のことでした。ヘブル語の「ベン・ヒノム」をギリシャ語に直すと「ゲヘナ」になるそうです。「旧約」の時代、イスラエルの悪王達は、「バアル」という偶像の神を拝み、バアル信仰のしきたりに従って、自分の子供を焼いて神に捧げる、ということをしていました。「子供を捧げる」というのは、当時、他宗教においては広く行なわれていたことです。真の神に背いた王達がそれを行なったのが、「ベン・ヒノムの谷」でした。聖書の神は「子供を捧げる」等という行為を厳しく戒めておられます。さらに「そんなことをする者を裁く」と言われます。そこから「ベン・ヒノムの谷」は、「神の裁き」を象徴する場所となりました。後には、その場所はエルサレムのゴミ焼却場となり、ゴミを焼く火が絶え間なく燃えている場所となりました。そして、その「神の裁きの象徴」であり、また「絶え間なく火が燃えている『ベン・ヒノムの谷』」の名前は、特定の場所を示す以上に、「神の裁き」そのものを意味する一般名詞になったのです。「神の国」が「神との関係」を表すように、「ゲヘナ(地獄)」も「神の裁き」という状態に主眼が置かれた言葉なのです。「神の裁き」の下にあれば、当然、「永遠のいのち」に入ることは出来ないのです。

イエス様は、「人は、『神に裁かれる状態』ではなく、『神の御手の中に入り、神との良き関係の中で生きること』、それが何よりも大切で、何を失ってでも、それを自分のものに、人生の目的にしなければならぬ」と言われるのです。

しかし、こう言われる時、イエス様は具体的には、何をイメージしておられたのか。そこで思い出さなければならないのが、このイエス様の言葉は、元々、弟子達の「誰が一番偉いか」という論争から始まっているということです。イエス様は、この個所の最後で「そして、互いに和合して暮らさなさい」(50)と言われました。つまり、「誰が一番偉いか」とお互いにピリピリ競い合っているような状態は、本来、神の支配に入っている状態ではないのです。CSルイスも「人間の最大の罪はプライドだ」と言っています。プライドから、妬みや、僻みや、自己中心や、裁きや…そのようなものが出て来るのではないのでしょうか。そのプライドに支配され、プライドに振り回されて、お互いに和合出来ない状態は、「神の御手」の中から飛び出して、自分を「神の裁き」の下に置くような状態なのです。私達に人間関係の問題をもたらし、私達が「神の国(支配)」に入ることを妨げている一番のもの、それは恐らく「プライド」です。私達は天国について、どのようなイメージを持つでしょうか。皆が優しく労わり合い、憐れみ合い、心から愛し合う、そういう恵みに満ちた世界を想像します。「天国に行ったら、右と左に分かれて争っていた」、そんな天国なら、永遠に暮らすのが、なぜ楽しいのでしょうか。「神の国」は平和です。「神の国」は和解です。「神の国」は仕え合いです。だから、イエス様がここで言われる一番のことは、私達の中に、その平和、和解、和合、「神の国」の特徴を壊すものがあれば、それを切って捨ててしまいなさい、ということです。「誰が一番偉いか」等という論議は、最も「神の国」から遠い論議なのです。

でも、そのためにはどうすれば良いのか。イエス様は「地獄では蛆が尽きることも、火が消える

こともない。人は皆、火で塩味を付けられる」(48～49 新共同訳)とされます。「火で塩味をつけられる」とはどういうことでしょうか。「コロサイ書」に「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう」(コロサイ 4:6)とあります。「塩味をつけられる」ということは、「神の国」を生きる者の特徴として使われる言葉です。しかし「火」とは、何を意味しているのでしょうか。これは、私達にやって来る様々な試練かも知れません。人は、確かに試練によって清められます、導かれます。カナダで開拓伝道を始めた頃、教会会議の伝道委員会の人達と一緒に食事をしながら交わったことがありました。1人の高齢の兄弟が自分のことを話して下さいました。彼は、戦後すぐに旧ソ連(ウクライナ)からカナダに移住して来た人でした。旧ソ連では、メノナイトの人達は大変な迫害を経験しました。彼は言いました。「ある日、 коммуニストが家にやって来て、私の父を連れ去った。父は2度と帰って来なかった」。こういう事件が沢山あったのです。しかし彼は、その辛い話をにこやかな表情で話すのです。私は、その人の中に「もう何があっても揺れない『樅の木のような信仰』」を感じたのを覚えています。CS ルイスは言いました。「もしも世界が実際に『魂をつくる谷』であるならば、世界は概してその仕事を良く果たしているように思われます」(CS ルイス)。それを思う時、神が私達に試練がやって来るのを許しておられる、それが理由の1つかな、とも思います。

しかし、48～49 節の「火」は、良く読むと「地獄の火」を意味していることが分かります。その言葉通りの「地獄の火」を、私達は経験していません。でも「地獄の火」を経験された方がおられます。イエス様です。イエス様は、私達に代わって「神の裁きの火」を経験して下さいました。その意味で「地獄の火で塩味をつけられる」というのは、「十字架によって…」ということではないでしょうか。水野源三さん(子供の頃の脳性麻痺で、生涯、瞬きしか出来なかった方ですが、瞬きを使って神様を讃美する素晴らしい詩を作り続けた方です)がご自分の信仰を証する詩を書いておられます。「もしも私が苦しまなかったら、神様の愛を知らなかった。もしも多くの兄弟姉妹が苦しまなかったら、神様の愛は伝えられなかった。もしも主なるイエス様が苦しまなかったら、神様の愛はあられなかった」(水野源三)。しかし水野さんは、イエス様の苦しみが自分のためであったということもしっかりと受け止めておられます。「ナザレのイエスは…本当に知らないと、私も叫びました、私も叫びました、主よ主よ、ゆるし給え。ナザレのイエスを…十字架につけよと、私も叫びました、叫びました、主よ主よ、ゆるし給え。ナザレのイエスよ…そこから降りてみよと、私も叫びました、私も叫びました、主よ主よ、ゆるし給え」(水野源三)。そして、その自分のためにイエス様に死んでもらった者としての生き方も、詩に書いておられます。「主よ、あなたが十字架にかかって愛しておられるあの人を、愛のない私も心から愛させてください」(水野源三)。つまり、「イエス様が十字架にかかれた」、その思いを、私達が本当に受け止めようとする時、十字架の火は、私達に塩味をつけて行くのではないのでしょうか。つまらないプライドにこだわっている私達が、和解へ、和合へ、導かれて行く。それはつまり、私達の心が神の支配の中にもう一度引き入れられて行くということなのではないのでしょうか。

最後に、淵田美津雄という方の書かれた「真珠湾からゴルゴダへ」というお証を紹介して終わります。十字架で塩味をつけられるということをも具体的に教えてくれる証しです。淵田美津雄という方は、日本軍の真珠湾攻撃の爆撃隊長をしていた方です。日本が負けて戦犯を裁く裁判が始まりました。彼は旧海軍の軍人として「軍事裁判は、勝者が敗者に対して行なう復讐だ」と怒りと憎しみを燃やしていました。そんな時、アメリカ軍の捕虜になっていた日本兵から不思議な話を聞きます。日本兵が捕虜として収容されていたキャンプに、いつの頃からか1人のアメリカ人の若い女性が現れるようになり、日本兵に何かと親切をしてくれるようになりました。あまりの親切に心打たれ、また不思議に思った彼らは、「お嬢さん、どうしてそんなに親切にしてくれるのですか」と尋ねました。彼女はやがて答えました。「私の両親が日本軍によって殺されましたから…」。話はこうでした。彼女の両親は、宣教のためにフィリッピンにいましたが、日本軍がフィリッピンを占領したの

で難を避けて山中に隠れました。やがて 3 年後、アメリカ軍の逆上陸によって日本軍が山中に追い込まれました。そしてある日、その隠れ家が発見されて、日本軍はこの両親を「スパイだ」と決めて、「斬る」と言いました。両親は「私達はスパイではないが、どうしても斬るというのなら、支度をしたいから 30 分の猶予を下さい」と言いました。そして与えられた 30 分で、聖書を読み、祈り、斬られて行ったのです。アメリカでその話を聞いた彼女は、悲しみと日本軍に対する怒りで胸は張り裂けそうでした。しかしある時、彼女は「両親は殺される前の 30 分間に何を祈ったのだろうか」と考えました。その時に、彼女の心は憎しみから人間愛に変わったというのです。

淵田さんは「美しい話だ」とは思いましたが、良く分からないものがありました。そんなある日、渋谷駅の前で 1 人のアメリカ人が道行く人々にパンフレットを配っているのに出くわしました。「私は日本の捕虜でした」と題してあり、中には『獄中で虐待されている時、人間同士がなぜこうも憎み合わなければならないのか』と考へ、『人間相互の憎み合いを兄弟愛に変える』というかつて聞いたキリストの教えに心が向き、聖書を調べてみようという不思議な欲求に捕われた」とありました。同じ心境だった淵田さんは、心が動き、聖書を買って読んで見ることにしました。読んでいるうちにぶつかったのが、キリストの十字架上の言葉でした。「父よ、彼らを赦したまえ、その為す所を知らざればなり」(ルカ 23:34)。その言葉に出会った時、淵田さんは、あのアメリカ人の若い女性の話が頭にひらめきました。彼女が斬られる前のご両親の祈りをどう理解したか、それが分かったのです。「神様、今日本の軍隊の人達が私達の首をはねようとするのですが、どうぞ彼らを赦して上げて下さい。この人達が悪いのではありません。地上に憎しみや争いが絶えないので、戦争などが起こるから、このようなこともついてくるのです」。そこに思い至った時、淵田さんは目頭が熱くなり、涙が溢れ、そしてキリスト教信仰に踏み出すのです。

私達の信仰生活を導いて行くのは、十字架を思うことではないでしょうか。主はどのような思いで、私のために十字架にかかれたのか。主は、私がどのように生きることを願い、十字架にかかれたのか、それを忘れないことだと思います。それを思うことが、私達を「神の国」に導き直します。それを思うことが、私達が誰かを躓かせることから守ります。私達は、もう一度、私の「いのち」のために十字架に架かれたイエス様の願いに、その十字架を見守られた神様の願いに、思いを致したいと思います。そしてそれを大切にして「神の国」の中を歩いて行きたいと願います。